

努力するチャンス

いとう
伊藤

あきひで
彰英

基幹労連・労働政策グループ・中央執行委員

夏休みの終盤、子ども達に宿題の確認をしたところ、「学校の宿題なんて2日もあれば楽勝だよ」と返ってきた。私の幼少期と比較しながら、これも「ゆとり教育」の一部なのであろうと自分自身を納得させることにした。教育に関しては、私のような素人が教育現場で奮闘されている方や専門家を差し置いて口を挟む余地がないことは重々承知しているが、子をもつ親の願いということでご容赦いただき、私なりに感じたことを書いてみたい。

最近の保護者会では、個性を伸ばす教育の重要性や差別しない（優劣をつけない）教育への理解がしばしばテーマとなるが、これらは実は表裏一体のものではないだろうか。卑近な例ではあるが、幼い頃運動の苦手な愚息は運動会が嫌いであった。特に徒競走では、1位から3位の子どもは順位フラッグの前に、競技が終わるまで誇らしげに並ぶのに対し、自分の走る順番を終えるとすごすごとクラス席へ戻り、悔しそうにしていた。しかし、その悔しさがあったからこそ懸命に努力し、数年後にはリレーの選手に選ばれたと誇らしげに告げにきたことが、今でも脳裏に浮かぶ。他方、苦手は苦手と割り切り自分の得意な図工に励み、作品が展覧会に出展されて喜んでいた子もいた。それもこれも客観的かつ適正に評価され、悔しさを知り、努力したからこそ得られた達成感であり、また悔しいからこそ個性を活かし得意分野で巻き返そうと励んだことによって得られた現実である。

ところが、優劣がつくことを嫌い、徒競走を競技種目からなくしたり、手をつないで同時に

ゴールインさせたり、また差別に繋がるなどとして通知表を二段階評価にしたりする学校もあるらしい。誤解を恐れずに言えば、学校から評価をなくして、結果平等（？）で対処することが本当によいのであろうか。むしろ自分を見つめ直して努力する機会を奪ってしまうことになり、子どもの成長にとっては非常に残念でならない。夏休みの宿題の量で努力を量るわけではないが、共通の尺度で努力、切磋琢磨した結果を公平に評価することが大切ではなかろうか。悔しければ努力すればいい、自分にその才能がないと思うなら、長所を伸ばしていくことを考えればいい。そのような能力をつけさせていくことこそが大切だと思えてならない。

一般社会に出れば、否応なしに評価と待遇の荒波に晒されることになる。しかも受験と違い、結果が出れば決着するものではなく、評価に優劣がある中でも同じ箱の中で競争を続けなければならない。それにどう対処すべきか、子ども達には充分な対応力がない。フリーターやニートの増加は、確かに経済構造の変化によるところは大きいが、努力を知らずに成長した故という発想も、あながち切り捨てられない。

現代の子ども達は一体どこで「努力する」ことを学べばいいのか。適正な評価のもとに努力が存在し、そのうえに個性が輝くのではないか。個性を伸ばすためにも、そのベースとなる努力するチャンスを子ども達から奪わないで欲しい。

愚息から「僕には得意分野があるのかなあ」とよく聞かれるが、私は決まってこう答える。「お前には努力という才能があるよ！」